映画『カウラは忘れない』に寄せて

カウラはオーストラリアのシドニーから西に約 320 粁の内陸にある。人口は現在約 1 万 2 千人、当時は約 4 千人。第二次世界大戦がはじまると連合軍のカウラ第十二捕虜収容所ができ、オーストラリア軍の第二十二守備大隊が管理に当たった。最初はアフリカ戦線で捕虜となったイタリア兵が収容されたが、南太平洋の島々が戦場となると、ニューギニア、ニューブリテン、ガダルカナルなどから傷病兵、駆逐艦や輸送船の沈没にともなう漂流者など、日本兵の捕虜が次々と送られてきた。オーストラリアは捕虜の権利義務を定めた、ジュネーブ条約を守り、衣食住をはじめ、すべてにわたって捕虜を人道的にあつかった。1944 年 8 月 5 日、日本兵捕虜 1,104 人による史上最多の集団脱走事件が起こった。これにより、日本兵捕虜 234 人、オーストラリアの監視兵ら 4 人が死亡した。

この映画は『クワイ河に虹をかけた男』（2016 年 8 月公開）の満田康弘監督が、「カウラ事件」の深層に挑んだ渾身の第 2 作である。映画を鑑賞された土肥秀行さんに寄稿して頂きました。(編集部)

土肥秀行

2021 年 9 月の連休に、念願であった『カウラは忘れない』（満田康弘監督、2021 年）鑑賞を、京都みなみ会館にて果たす。来年夏にアデレイドでホームステイ体験をすることになっている中 2 の息子と連れ立つため、この日程とする。息子は、予め中野不二夫著『カウラの突撃ラッパ』を読んでいたので、問題の所在を了解していた。過去の日本兵による行動が一般に不可解と言われようが、そこまでではないとのことだった。つまり不可解であることは不思議ではなく、当たり前ではないか、という感想なのである。映画を見て、さらにその感を強くしたようだ。そもそも現代を生きるわれわれが、特殊状況下の当時の日本兵のことがわかろうかという、ある種の傲慢さを諫める姿勢であり、まったく今の若者らしい。

親としては、日豪関係をとらえる際の前提として、次の点をおさえつつ、収容所について知るよう彼に薦めている。すなわち、すなわち、日本軍の捕虜となったオーストラリア兵は泰緬鉄道建設で酷使される一方、カウラ他の収容所に入れられた日本兵捕虜は、ジュネーブ条約遵守のオーストラリア軍のもと安穏と暮らしていた。この対照性に現代のわれわれは留意すべきである。

労役なし、食べ物は十分、野球や花札・麻雀も自由であって、戦闘続行中の同胞を思えば、うしろめたさを覚えてあまりある環境にありながら、だからこそ求めてしまったのかもしれないのが 1944 年 8 月 5 日の集団脱走「カウラ事件」である。それにしてもなぜ、という点に、これまでカウラにむけられてきた問いは収斂する。この映画をも、表面上は、貫く問いとなっている。

イタリア文学研究者である筆者が関心を寄せる、日本兵と並んで収容されていた北アフリカ戦線で捕らえられたイタリア兵捕虜とは、対照的な運命であった。あまりの居心地のよさから、戦後もオーストラリアに残ろうとしたイタリア兵は多く、本国に帰ってから、あらためて移民してきた者もいた。「イタリア人は呑気」とのステレオタイプに沿う経験のように思えるかもしれない。たしかに、敵国人としてタトゥラ（https://goo.gl/maps/fP2x5TTgpUNmuEqc8）に 5 年以上収容された在豪と在英のイタリア系民間人と比べれば、経験の重さは違っただろう（『タトゥラの風』として民間人による収容生活日記が公刊されている）。さらには、同じくリビア戦線よりトブルックの戦闘（1941 年 1 月）後に運ばれていった、インドのヨル収容所で酷寒と飢えに苦しんだイタリア兵たちと比べれば、はるかに恵まれた環境であったことは間違いない。インドでは、「（存在しない）第 29 キャンプに行く」（＝あの世に旅立つ）という隠語が存在したように、死と隣り合わせの日々であった（その名も『第 29 キャンプ』との解説書あり）。ただ、21 世紀になってはじめ

て本格化した諸々の収容所体験の語りでは、インドの苛酷さを強調するあまりオーストラリアの「楽園度」が増幅されてしまっている。この傾向は、無謀で無意味と映るブレイクアウトを図った悲劇の日本兵との比較においても認められる。

日本兵捕虜がなぜあえて脱走事件を起こしたのか。脱走というには、あまりに逃げ切れる可能性のない場当たり的な試みであった。オーストラリア軍への抵抗は少なく、自刃か縊死による自決を図る試みでしかなかったように思える。脱走でなければなんと呼んでよいのか判然とせず、曖昧に「事件」とするしかない。その事件の動機であるが、戦陣訓にある「虜囚ノ恥」が根本にあり、そして収容数増のために下士官と一般兵が分離させられそうになったのが直接的な引き金とされる。この従来の説明を、映画の中の生存者の証言もなぞる。しかし映画パンフレット所収、山田真美論考「カウラ事件の本音と建前」にあったように、後者は「ただの言い訳」（ある生存者のもらしたひとこと、山田氏によれば「建前」）である可能性がある。兵卒にとっては、そもそも下士官は疎ましい存在である（その逆はいざ知らず）。カウラ収容所では軍隊の序列は管理システムに援用されず、俘虜は平等に扱われていたというが（むろん士官は別のエリアにおかれており、兵卒・下士官と交流はなし）。

たしかに、事件が起こってしまった要因は、日本人的な「右に倣え」にあるかもしれない。「空気を読む」ような日本文化の悪しき伝統をここにみるのが、この映画にアクチュアリティをもたせるために導入された教訓である。劇中劇として引用された坂手洋二作の戯曲『カウラの班長会議』は、ありえた結末として、やはり自分は立ち上がらないと本心を明かす個人を見せていた。望まぬ集団自決を避けるには、「空気を読まない」勇気をもつべきであったろう。しかし、当時、日本ばかりでなく、ファシズム体制下のイタリアの市民も軍人もまったく「右に倣え」だった。ファシズム期が長きに渡ったイタリアでは、人々の同意を得るための、権力側の思惑の浸透と計算されたアメの絶妙さは、他の比ではなかった。

同調圧力への批判を持ち出してしまうと、他のことがみえなくなるリスクがある。むしろ、「言い訳」やうわべの理由付けの奥にあるはずの「本音」はさまざまで、ゆれうごく、そのことに気付くべきではないか。やがて「本音」が何であったかもわからなくなる。だから、証言者たちは一様に、戦陣訓ゆえ、そして下士官と兵は一体であるべきだから、と説明するようになる。そして戦後生まれのわれわれはそれを真に受けるかぎり、どこか疑問に感じつつも、思考を停止させ、ファナティックな自殺行為としかとらえられなくなる。たしかに戦争が終わる前なので、捕虜たちは、自分はあわせる顔がない、帰るべきところがないと絶望していただろうが。

とはいえ、『カウラは忘れない』は、事件の動機を追求するだけの映画ではなかった。謎の解明がすべてではないから、通り一遍の説明が繰り返されても、そこで終わりではない。実際には、カウラの元捕虜の立花誠一郎氏の個別の体験が、内容の半分を占めている。立花氏は、捕囚に遭ってからハンセン病を発病し、収容所内で隔離され孤立していた。ゆえに計画について知らされず、生き残った。戦後、岡山県長島にある療養所の邑久光明園に入り、そこで一生を終える。今回の映画の監督はもともと立花氏を追っていたという。氏についての満田監督の映像作品は『ダブル・プリズナー』（2011 年）と題する。2 つの収容所を生きたためである。ただし 2 つ目は決して出ることのない場所だった。カウラでもダブル、二重に収容されていた。しかし、決起においていかれた無念は、実際そう感じていたかはわからないが、表に出さない。鍛冶職人であったので、収容所では、即席でトランクケースを「朝鮮台湾」出身者に 11 個作ってあげたという。虐げられる者同士の共感ゆえであったか。もちろん「立花誠一郎」というのは、瀬戸内の療養所に入ってからの仮名である。仮名であるからカウラ事件（自分以外のサバイバーにとっては、恥ずべき捕囚であり、決死の試みからの恥ずべき生還を意味する）を語れたという。しかし、語れば語るほどに、決起に乗れなかった自らの例外性が浮き上がり、他の人々のように「言い訳」を繰り返す、暗黙の了解の輪から自然と切り離されてしまう。立花氏をおそうコントラストは、この映画で意図されているところではない。立花氏も、孤独であったとはいえ、他との本質的な違いは意識していない。しかしカウラでの記念式典は欠かさない村上輝夫氏が、黙して語らずとも、強く裡に秘めるうしろめたさとの対照性はあきらかである。あくまでも立花氏の説明では、他の捕虜と自分が違うとはされない。自分が余計に虐げられているといった告白・告発はしない。しかしそれが立花氏の「人のよさ」に回収されてしまっている。映画の中で高校生の相手をする立花氏はい

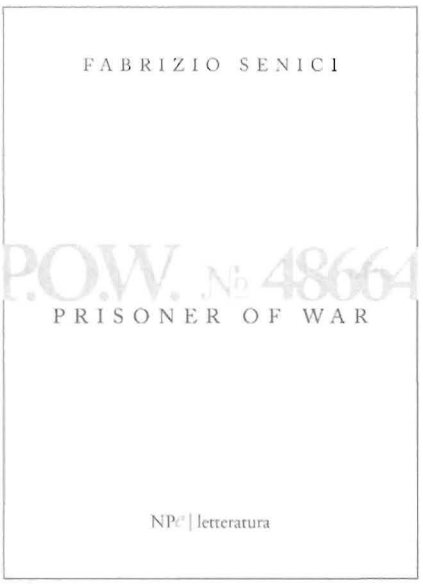
い人でいるしかないのだ。

仮名といえば、大抵の捕虜は仮名（偽名）で通していた。捕囚の身を恥じたゆえ、そして本国の家族に迷惑がかかるからである。事件で亡くなった人たち（234 名）の在カウラの墓碑銘は、仮名のまま、本人確認のできていないものも多いという。日本の国家の怠慢を責める声もある。その場合は、亡くなっても、恥ずべき捕囚の殻を脱せないのである。そのことを「カウラは忘れない」であろう。この主格（「カウラは」）には、カウラの経験が現代のわれわれに投げかけ続ける視線が意味されている。

8 月 5 日に続く日々、事後処理には朝鮮台湾出身者があたった。そしてイタリア人も携わったという。このことについて、イタリア側の証言が残っていないか、探しているところである。2019 年に出版されたセミフィクションの「小説」の形態（いまもっともよく用いられる手法）をとる『捕虜番号 48664』（ファブリツィオ・セニチ著）では、自らを語ることのなかった父ジャンニのオーストラリアでの捕囚を主人公が追体験する。あるとき、初老の息子アルフレードは、日本人の行為に見合うイタリア語がないと気付く。たしかに、少なくとも何かからの退避を意味する「フーガ」（音楽用語でもある）ではない。ではなんとすべきか小説は示さないが、それはイエスと接吻を交わして裏切ったユダが一目散にユダの樹にかけつけ首を吊る、その様に似ており、遠ざかるというより、猛烈な接近のイメージである。

カウラ収容所については、POW 研究会の E メール連絡網を通じ、田村恵子氏と西里扶甬子氏に多くをご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

オッティリア・ヴィチェンティーニ・レジナート『タトゥラの風、1940 年から 1946 年まで。オーストラリアでの 6 年間の収容生活』（Ottilia Vicenzini Reginato, *Il vento di Tatura 1940-1946. Sei anni di internamento in Australia*, Torino, Robin, 2016）



ファブリツィオ・セニチ『捕虜番号 48664』（Fabrizio Senici, *P.O.W. n. 48664*, Lomazzo-Como, New Press,2019）

セルジョ・アントニエッリ『第 29 キャンプ』（Sergio Antonielli, *Il campo 29*, Milano, ISBN edizioni, 2009）